

今年9月5日、私はベネチア国際映画祭の会場にいた。この会場で、庄内映画村株式会社初の支援作品『スキヤキ・ウェスタン ジャンゴ (以下、ジャンゴ)』の公式試写が行われる。コンペティション部門で日本から唯一選ばれた作品である。会場のリド島には、監督、俳優を含め関係者が勢揃いしていた。映画『蝉しぐれ』の撮影で知り合った関係者も数多い。

2005年に公開された『蝉しぐれ』は、私が初めて映画に関わった作品だ。もともとコンピュータの仕事をしてきた私は、映画とは縁もゆかりもなかったが、どういう訳か、映画制作の現場に関わってしまった。人生というのは面白いものである。

『蝉しぐれ』は、山形県鶴岡市にある松ヶ岡開墾地の農地の一部をお借りして、5棟の江戸末期の庄内藩士の家を再現し、そこで撮影を行った。オープンセットの製作費は約1億円。

撮影終了後、映画公開までの一年間、『北の国から』で有名な富良野に飛び、そこで蓄積されたノウハウを参考にしながら、『蝉しぐれ』を庄内地方でどう宣伝してゆくかを関係者と話し合った。オープンセットの一般公開に向け、セットに手を入れ、130年以上経つ松ヶ岡開墾場の大蚕室に資料館を作った。2004年4月から一般公開されたオープンセットと資料館には、一年間で約10万人の人が訪れた。

2005年8月、『蝉しぐれ』公開2カ月前に、来年も引き続きオープンセットと資料館を継続するかどうかの話し合いが行われた。設備を維持するのは経済的にも大変なこと。何か新しい事でも起こらない限り、一年以上この施設を維持していくのは無理なことだった。やはり取り壊しの方向で話はまとまった。これで自分の仕事も終了する。「これで良いのだろうか」とも思ったが、正直、残念な気持ちでいっぱいだった。

松ヶ岡開墾場には、国の史跡に指定され130年以上たつ大蚕室が5棟残っている。それが開墾記念館やギャラリー、農具館などとして一般に公開されている。『蝉しぐれ』の撮影が行われてから、訪れる人が5倍に増えた。地域は、元気になりつつあった。この元気を継続していくために、何か方法はないのだろうか。再度考えあぐねていた時、新たに時代劇2本の撮影があるとの情報が入った(その時点では、そのうち1本が『ジャンゴ』だとは知るよしもなかった)。制作会社は『蝉しぐれ』と同じセディック・インターナショナルだった。

翌日、私はすぐに東京へ飛んだ。庄内で時代劇2

本の撮影ができないかと制作会社に頼みに行った。すでに撮影場所が決まっていたにもかかわらず、東京側は、真剣に話を聞いてくれた。ある条件をクリアできれば、庄内での撮影が可能になってきた。庄内撮影を可能にするには、やはり予算が足りないのだ。ウン千万円を庄内で集められるか。東京側の提案だった。かなりリスキーな話である。しかし、何かが動くときに私はあまり悩んだことがない。そして、判断の基準のもうひとつは、人である。東京側に、私をだますような仲間はいない。私は即座に「わかった用意しよう」と答えた。これで庄内撮影は

バリューサイト
VALUE SIGHT

地元有志の英知を結 継続的な映画撮影を 世界に飛翔する庄内

近年、東北を舞台にした映画作品が目立っている。これらの映画の多くは、地元の行政を中心としたフィルムコミッションによって誘致が行われてきたが、従来の慣例を覆し、民間有志の出資による株式会社を設立し、精力的な映画誘致によって地域の活力づくりを目指す庄内映画村の挑戦に注目したい。

開始になる。

映画業界には、「男の一言、紙よりも重し」という言葉がある。映画は、一本制作するにもあまりに関係者が多く、ある決定をするまでに時間がかかる。そのため、契約書を待たずに言葉一つで動くというケースは映画業界ではよくあることだ。

庄内に戻った私は、まず行政機関にいる知人にこの件を話した。やはり一笑に付されてしまった。行政にそんな予算などあるわけがない。次に財力のあるパートナーをお願いすることを考えた。単純にお金持ちに頼めないかということである。しかし相手の気持ちが乗ってこなかった。そうこうするうちに正月が過ぎてしまった。東京から、来月『ジャンゴ』の三池嵩史監督が庄内へ行きますと連絡が入った。先方はすでに約束通り動いている。

2006年1月末、『蝉しぐれ』で親しくなった庄内の方たちに集まってもらった。いろいろ相談した結果、新たな法人を作ろうと話が決まった。法人の目的は、映画撮影を誘致し、地域を元気にすること。そのために出来る限り多くの人たちに株主になってもらい、映画制作のための資金を調達することになった。それからは毎日人と会うことが日課になった。2月、4月と三池監督がロケハンに訪れた。もう刻限が近づいている。6月末までに40名の方にお会いし、35名の個人・法人の方が株主になってくれた。100名集めてからの立ち上げを目指していたが、時間的に限



「ジャンゴ」が撮影された石倉オープンセット

集して 誘致 映画村

庄内

庄内映画村株式会社
代表取締役

宇生 雅明



界だった。株主は引き続き集め続ける。しかし、とりあえず35名で会社を立ち上げることにした。7月7日7時に、松ヶ岡開墾場の三番蚕室で事務所開きを行い、庄内映画村株式会社は走り始めた。

それからは、もう大変だった。ロケハン、松ヶ岡オープンセットの引っ越し、石倉にもオープンセットを建設し『ジャンゴ』撮影開始。その途中にも『山桜』『おくりびと』の撮影予定の打合せ、宿や食事の手配、エキストラの募集等、怒濤のごとく作業が続いた。2007年の正月は夢のごとく過ぎ、ほっとしたのは、女座頭市『ICHI』の撮影が終了した6月中旬だった。

振り返ってみると、映画の支援は、たぶん褒められるくらいできたと思う。地域には、5億近いお金は落とせた。ただし、「地域を元気にする事ができた

か?」「来ていただいた方々が満足したか?」また「他の観光地との連携が取れたか?」と聞かれると、まだまだ十分とはいえない。

すでに、来年は4本の映画撮影が予定されている。今は充電期間中。まずは足元を固め、映画村を見つめ直し、新たな観光地といわれるより、映画スタッフや観光客を迎える新しい「歓迎地」として発展させたいと願い、準備を進めている。

初支援の『ジャンゴ』がベネチア国際映画祭にノミネートされ、レッドカーペットを歩いた。公式試写終了後、満席の1,200名の観客から拍手が鳴りやまなかった。残念ながら賞は逃したものの、イタリアでは間違いなく受けた。日本では賛否両論の評価であるが、これで良いのだと思う。映画なのだから。来年撮影の映画も話題作ばかり。映画誘致によって地域を元気にする。つくづくやりがいのある仕事だと思う。

■ 宇生 雅明 (うじょう・まさあき)

庄内映画村株式会社 代表取締役

長野県長野市生まれ。東京のデザイン事務所にてモロゾフの店舗、POPデザインを担当。1985年東京でIT企業「ベター・ビジュアル・システムズ」を設立。

2001年「蝉しぐれ」のシナリオを持ち始めて庄内に入る。2005年松ヶ岡に「蝉しぐれ」資料館設立。

2006年7月7日庄内映画村(株)を設立。以降「ジャンゴ」、「ICHI」、「おくりびと」、「山桜」の庄内プロデューズ担当。

〒997-0158

鶴岡市羽黒町松ヶ岡字松ヶ岡29番地松ヶ岡開墾場三番蚕室内

TEL 0235-62-2080・FAX 0235-62-5181

ホームページ : <http://www.s-eigamura.jp>